

展 望

支部長からのメッセージ —日本の強みと可能性を考える—

I G S 日本支部支部長 三木 博史

はじめに

はからずも、今期も支部長に再選されました。これからの2年間、よろしくお願いいたします。

支部長として、これまで「地域再生のための処方箋」と題し、ジオシンセティックス技術情報 2010 年 3 月号と 2011 年 7 月号に連載を発表してきました。後者は、I G S 日本支部ホームページの「支部長メッセージ」に掲載中です。

この連載では、いま地球規模のパラダイムシフトが進行中で、こうした動乱の時代においては、個人も企業も地域社会も国家も、裸一貫の生活力を取り戻し、みんなが草の根のようにつながって、自然や周りの人々と共生する知恵を出しながら、持続可能な地域自給圏の再生を目指し、たくましく生き延びていかなければならないとの観点から、いくつかのヒントを紹介してきました。

今回も、そうした一連の観点からの報告です。「温故知新」という格言がぴったりの世界観・歴史観が展開する図書2冊の紹介を通じ、日本の強みと可能性を考え直します。

1. 『再起日本！—世界のハイテク技術を拓く』

本書の著者の前川正雄氏は、現在 MAEKAWA HOLDING CEO、兼、前川製作所顧問です。産業用冷凍機などを製造・販売する総合機械製造企業を率い、高齢者が現役時代に培った技能や技術を若い世代に伝承する、定年のない独自の企業風土を築いておられます。

以下、本書の要約です。

(1) 「すみわけ」を目指して

いま我々は、欧米の文明の没落と欧米以外の国々の劇的な勃興を見ている。しかしよく見ると、BRICS 諸国の経済にも危険信号が灯り出した。これは、現在の大量生産のレベルでは、新しい世界の市場は、遅かれ早かれ満杯になってしまうことを示している。逆にいえば、それぞれの国が無益な競争を止め、「すみわけ」をしないと生き続けられないことを表している。

20 世紀は、経済成長する国が増え、一時的に需要が増大したために資本主義的经营でも何とかやれた。大量生産産業が急増した特殊な時代といえる。新しい市場のニーズを 20 年で満杯にしてしまうほどの生産力を先進各国が確立してしまったのだ。資本主義の最後のあがきというべきか、20 世紀後半から欧米においては金融資本の暴走が始まったが、いずれそれも終わるだろう。

(2) 資本主義から場所主義へ

21 世紀には資本主義はなくなる。200 年続いている日本の会社を見ていると、「場所主義」で経営されている。資本もあるし、役員、従業員もいて、市場もあるが、それらがすべて「共同体」になっている。つまり共同体が主体で、資本はそのなかでツールの一つにすぎないのだ。(日本で 100 年以上続いている会社が 10 万社以上。200 年続く企業も 3000 社ある。韓国、中国はゼロ。)

生物の世界の進化とは、「すみわけ」の密度が高くなることである。ところが、この数百年、世

界はまるで反対方向に進んできた。「すみわけ」の世界をつくるのに成功すると、競争社会から次第に離れていき、自社独自の「場所」の確立に成功する。そして、この「すみわけ」された状態こそ、じつはハイテク製品が生まれる唯一の風土でもある。

「つくれば売れる時代」から「売れるものをつくる時代」への変化だ。後者では、自分たちの「場所」を深く認識し、顧客の本当のニーズを探らなくてはならない。この一点で、共同体をないがしろにする欧米のモデルは今後、一切通用しなくなる。金儲けに走り、「人・モノ・場所」が「人・モノ・カネ」になってしまった。

20 世紀までの分断の時代から、21 世紀からは統合の時代に入っている。「場所」がそのシンボルだ。グローバル化した 21 世紀のモノづくりは、全世界に通じる「公」の世界だ。「私」のみを大きくしようとしている企業は、何らかの形で社会的制裁を受ける時代に入りだしている。その意味で、江戸時代の「三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）」は、21 世紀に通じる企業理念だ。

(3) 西欧文明の崩壊が始まっている。原因は共同体の劣化だ。

ローマも食糧の生産が止まり、輸入が増えた結果、社会の停滞が始まった。ベネチアも船の生産が止まったとき、社会の活力が失われた。20 世紀の欧米もさまざまな生産拠点を中後進国に移した結果、輸入が増え続ける一方、製造業の停滞が始まった。

しかし、日本はこれに当てはまらないだろう。その差は、モノづくりの共同体性から生じていると考える。欧米の場合、「体を使う仕事は、本来は奴隷がやるものだ」という抜きがたい考えがある。少しでも経済がよくなり豊かになると、この考えが頭をもたげる。そして結局、それが命取りになる。次第に自我が強くなってきて、階級ができあがり、それによって共同体が崩壊するという過程を経た。古代ローマから現在のアメリカに至るまで、同じプロセスをたどっている。

日本の場合は逆で、共同体性をいかに上げるかを常に追究してきた社会である。縄文以来、個（私）を抑え、さまざまな分野の専門家どうしが、それぞれの直感を合成して、ものの実体をつかむことを繰り返してきた。この段階で、共同体は一步前進し、質が上がることになる。

欧米と日本のこの違いは、変わりようのないものだろう。私は 10 年前からスイスに住んでいるが、崩壊する側の西欧に身を置きながら、この違いに思いをはせている。何百年に一度起きる、歴史の決定的瞬間を見る思いだ。

(4) 日本の「寄り合い」文化

日本の村落共同体では「寄り合い」という制度があった。この寄り合いでは、全員が徹底的に話し合い、全員にとって満足のいく結論が出てくる。もっと大切なのは、結論が出る過程で共同体の質が深まることであり、次の寄り合いではさらにレベルの高い話し合いが行われる。

欧米は、覇権の獲得こそが文明の進化につながるのだと誤解してしまった。文明は、文化が進化し普遍化した結果なのだが、文明の進化のみにしゃかりきになり、文化を無視してしまうと、やがてすべてを失うことになる。

(5) 外から広げる日本の「まれびと文化」

モノづくりの共同体や脳を変えるのは、「外圧」だ。最近の日本のモノづくりに加わった外圧は、大東亜戦争だろう。日本のモノづくり共同体全体がここまで激しく反応したことは有史以来なかった。原料もエネルギーも技術も不足していたが、ゼロ戦一万機の生産を達成した。これが共同

体を進化させ、人間のつながりを深め、新しい製品を生み出した。その結果、共同体そのものも変化を始め、いま、我々はその延長線上にいる。

外からの「まれびと」は文化や文明を飛躍的に伸ばす。日本は「まれびと」に対して警戒感がなかったが、欧米は、まず拒否してきた。日本は「まれびと」をまず受け入れ、全部飲み込んで、嫌なものは吐き出す。神道の「清める」文化、仏教の「もったいない」という文化、もののあわれの感性を深める文化、禅による行動と哲学を一体化する文化、それらを統合した江戸文化、大東亜戦争による日本型モノづくり文化の完成。これらはすべて、「まれびと」がもたらしたものを日本古来の文化とあわせて新しく進化させてきたプロセスそのものではないだろうか。

最近、すべてを受け入れ溶かし込む日本のやり方、すなわち日本発の「まれびと」が世界に向かい始めた。日本食ブーム、漫画、アニメ、ゲーム、日本的生産方式、最近の日本の都市、ハイテク産業集積地区などは、これから次から次へと海外に渡っていくのではないか。

今回の東北の大地震も「まれびと」だろう。その体験を統合し、次の「場所」に「跳ぶ」。そうやって、度重なる地震や津波に対応してきたのが日本の歴史だ。その度に共同体が深化し、新しい日本文明をつくる原動力になった。

(6) コトを発見してモノをつくる。

日本人は、現象の奥に意味や本質を感じとる、世界にない繊細な感性を備えている。日本のモノづくりにもこの感性が活かしている。

水産業や農業といった第一次産業も含めた「製造業」は一種の匠の世界、言葉では伝わらない世界である。農水産業で生産品をブランド化する取り組みは「場所化」を意味する。21世紀のモノづくりは、モノの奥に隠されているコトを発見して、「こういう使い方をしたい」という新たなニーズを汲み取って、20世紀の問題を解決する。コトを実現させることに主眼が置かれ、知恵と経験と文化がベースになる。このモノづくりは、20世紀とは桁違いに難しい。

コトは、「言霊」（言葉の奥にある深い世界のこと）ではないだろうか。とするなら、真のモノづくりは日本でなければ実現しない。

(7) 文化とつながった製造業こそ「産業の王」

21世紀のハイテク産業における技術は、何人かの匠で構成される共同体から生まれてくる。ここでは、文化と技能、そして、技術が一体化している。これこそ、21世紀の発酵型ハイテク産業地帯というべきだろう。これは、日本の製造業がはじめて挑戦する世界である。

先進国では、高付加価値化を目指した異業種の連携がますます重要になる。そして、いくつかの技術の粋を集めてシステム化するには、すぐれた共同体と寄り合い文化が必須である。

(8) 21世紀は日本の時代

会社の目的は「生き続ける」ことであり、その手段として利益がある。しかし、利益が目的になってしまうと、生き続けることが二の次になってしまう。それでは逆なのだ。

日本の製造業の原点は、異なる種類の情報を持った関係者が感覚知の「すり合わせ」を行い、それによって、スポット情報を面情報にし、最後に立体情報にして実体をつかむ、という一連のプロセスにある。改善につながるアイデアは、共同体となった改善チームからしか出てこない。

製造業は50年、100年かけてできあがる、場所性を強く持った産業であり、50年、100年かけて人をつくるところから始めないと本物にはならない。

これからは日本の製造業を中心に世界が回る。日本の製造業に続く二番手、三番手がないのだ。「共同体の質」とは、どれだけ速く、どこまで深く、全体の合意が得られるか、である。深い合意ができる共同体は一を聞いて十を知る。すぐ実行に移れる。結果は見事で、一糸の乱れもない。そうした企業文化が大事である。日本型共同体の再興を！

2. 『日本の米—環境と文化はかく作られた』

(1) 稲は命の根なり

「水田は文化と環境を守る。」たった一粒の種籾から 2000 粒、3000 粒もの米を実らせる稲。二年で 400 万粒、三年で 80 億粒、四年で 16 兆粒。「一粒万倍」といわれるこんな作物は他にはない。生産性が高いばかりでなく、栄養価が高く、長期間の保存に耐え、おいしかった。

8000 年の長期に及ぶ縄文の時代の狩猟採集経済は、稲がやってくると、その生産活動は、待ち受けたように全土に定着する。注連縄（しめなわ）から日常の道具、燃料、肥料に至るまで、いっさいを使いつくしてまた大地に返す藁（わら）の文化。このときから、日本列島の姿は一変する。「余剰」を生み出す社会が出現したのである。

(2) 水と日本人

日本民族のいのちの根である稲は、稲が必要とする水の技術とともにやって来た。水をめぐる緊張関係の文化。緊張関係によって共同体が生まれ、緊張関係によって共同体の秩序も維持される社会。洪水や渇水など、厳しい自然との緊張関係に加え、上流対下流、右岸対左岸、村対村、田んぼ対田んぼ、といった人間社会内部の緊張関係が無限に続く社会。それは、「水をコントロールする文化」にほかならなかった。

(3) 国土の大改造

水田という生産手段を通じて、自然を大改造し、大地の生産力を育成する「面」の事業。なによりもその事業は、水の事業であり、それを保証するためにこそ、森林を守り育ててきた。

二度にわたる国土改造の最初は、稲作開始から律令国家の成立、条里制に至る、長い時代であった。第二の改造は、室町末期から江戸中期にかけての、治水と新田開発の時代である。この大事業によって、今日の日本列島の姿が、ほぼかたちづくられた。

山あいの石垣水田や棚田の風景。こうした大事業に大勢の労働力が必要とされ、共同作業が開始された。「一粒万倍」の稲は、人口の増大を約束し、その増大がより大規模な水田の開発を可能にし、それはさらに人口の増大を促すことになった。そして、各地に部族国家ができ、やがて国が統一され、その仕上げの作業が「条里制」であった。

(4) 条里制

条里制は、統一国家が土地を掌握し、税金の取り立てがスムーズにできるよう、土地を一町（約 109 メートル）方角の、碁盤の目状に区画させ、水路と道路もそれに併せて整備させた地域開発計画であった。秩父の山深くまで、「太田千畳敷」と呼ばれる条里水田の遺構が残されている。壬申の乱を経て、天武、持統、文武と続く、奈良時代の何という強大な律令国家体制の力だろう。

(5) 山の文化

縄文の時代から、山々は栄えていた。江戸末期でも、5, 6 万人の木地屋に加え、漆掻き、猟師、炭焼き（たたら製鉄）、修験者などがいた。山のにぎやかさに支えられて日本の森林は守られ、

その水の恵みを享受してきた。そしていま、林業従事者は 11 万人。なんとさびれてしまったか。森林が土台から危うくなっている。山に投資し、山村をにぎやかにさせなければいけない。

(6) 森林は米が作った

森林は、実は米が作ってきた。高度に発達した文明国のなかで、日本人は木を伐っては植え、植えついで、緑を絶やさなかったほとんど唯一の民族である。漆や砂防（サボー）は、世界共通の国際語になっている。稲を育てる水、まさにその水ゆえにこそ森林は神聖であった。

新田開発の水のため、無名の農民たちによって、藩の保護や林業からも見離されていた荒廃地にまで、緑の樹々が植えられるようになった。そして、森林を守りつづけた山村の人たちの経済を支えたのは、谷間の段々畑や石垣水田であった。

日本の石垣水田の総延長は万里の長城の比ではない。そして、日本人が農業を止めたとき、山は崩れ落ちる。

(7) 木を植える文化

西欧の文化が、森林を破壊することで築かれてきたのに対し、日本の文化とは、森林を育てることで築かれてきた文化であった。式年遷宮でも「二十年に一度」、木曾の国有林から、樹齢 300 年を超える巨木約 1 万 4 千本が伐り出されていく。国家の財源であり、日本社会の基本のエネルギー源であった米（稲のチカラ）。その米を糶（ほしいい）とすれば 20 年は保存でき、20 年経つと倉庫から取り出して処分するというのが、律令時代の法律に定められていた。そのサイクルに沿ったのが「二十年に一度」の由来という。

(8) みな農業にかかわる水の土木技術者

以上のように、大地に即して歴史を見れば、「土木」の、何と大切な、ロマンに満ちた世界であることだろう。考えてみればつい三世代前まで、日本人は男も女も子供たちも、みな水の土木技術者であった。水の技術者だから、森林のことも土壌のことも分かっていた。そうした自然とのつきあい方を次代に伝えるためにも、日本列島における農業は、少数の大規模農家に任せるのではなく、兼業でもよい、一家の誰かは農業者であるような、そんな家々が各地に根を張っていることが、大切であると思わずにはいられない。

おわりに

以上より、日本型共同体を支える「寄り合い文化」、すべてを受け入れ溶かし込む「まれびと文化」、コトを発見してモノづくりをする言霊や文化とつながった「発酵型ハイテク産業」といった日本の強みを活かしながら、「全国に張り巡らされた石垣水田や棚田は、日本の文化と環境を守り、森林を含む国土の安定を支える根幹であり、土木技術者や農業者の役割が大きいこと」を再認識し、21 世紀の潮流である「すみわけ」と「場所主義」を深化させていく必要があると言えます。

参考文献

- 1) 前川正雄：『再起日本！—世界のハイテク技術を拓く』、ダイヤモンド社、2013 年 3 月 22 日
- 2) 富山和子：『日本の米—環境と文化はかく作られた』、中央公論新社、中公新書 1156、1993 年 10 月 25 日（初版）